



# 身近な自然



No. 12

新春号

## ビオトープ交流会観察会 in 白峰

昨年7月20日、白峰で観察会がひらかれました。今回は植物専門家の白井伸和氏の企画により、大前山の散策、白山麓民俗資料館の見学、白山高山植物園の見学と、盛りだくさんの内容でした。参加者は14名で、当会観察会に初参加の人も4名いました。

午前中は大前山のブナ天然林へ。そこは白峰集落のすぐ背後にあり、なだれ防止林として村の人達に大切に残されてきたそうです。りっぱなブナが急傾斜地に生え、斜面全体が木々に包み込まれているようでした。日の光にあたって葉っぱがキラキラ、明るい緑に覆われた林内は気持ちのいい空間でした。散策道を歩いて、斜面の上から下までをゆっくり観察。砂礫岩、ミズナラの大木の年輪、ブナの樹液、ノギランの花、ウバボタル、オカチョウジガイ（陸貝、枯れたミズナラの幹にい

た）、シロマダラ（稀少な蛇、草刈り後の散策道上で死んでいた）などを観察しました。

散策後、山頂広場で交流会活動について話し合い、お昼は全員で永清食堂へ。

午後は、白山麓民俗資料館から。館長の山口一男さんの説明で、周りの自然から生み出された白峰の文化とその歴史について学ぶことができました。そのあと山村古民家を自由見学。一番大きな「杉原家」では、囲炉裏を囲んで和気藹々と、休ませてもらいました。

予定より大幅に遅れ、西山高山植物栽培施設に到着したのは16時。栽培の様子を見学した後、白山高山植物園へ向かいました。絶滅が危惧される高山植物の保護育成事業がここで試験的におこなわれています。長年活動している白井伸和さんに詳しい話を聞きました。

18時に解散。時間をかけてじっくり見て回ることができ、充実した観察会となりました。



2008年7月20日におこなわれた白峰での観察会の折に、平成18年度以降の活動の経緯の説明と今後の提案をしました。

ご報告が遅れましたが、本紙の発行にあわせて、みなさまにお知らせ致します。提案内容については、概ね参加者の了解を得ましたが、次に開催される総会において再度確認します。

### 【18年度の活動】

平成18年度には、6月3日に金沢大学角間の里で総会を開催し、シンポジウム「『住民が守る地域の自然』～個人・団体間の情報交換と交流～」をおこないました。また、テーマを「保全活動がおこなわれている身近な水辺」として、4回の観察会を実施しました。

ニュースレター「身近な自然」は、第11巻の1回のみ発行となりました。会員名簿の作成を試みましたが、各会員へのアンケートの回収が進みませんでした。

### 【19年度の活動】

名簿作成の遅れなどから、総会をおこなうべきタイミングを逸し、具体的な活動を提起できませんでした。いしかわビオトープ交流会の新しい活動方針を明確にできず、名簿の発行のみの活動に終わりました。

### 【20年度の活動状況】

加藤明宏さん、源内伸秀さん、白井伸和さんより活動を再開すべきとの提案をいただき、また観察会の開催等の協力の申し出を受けました。相談の結果、3氏が主宰する形式で観察会の実施することになりました。

### 【総括：活動停滞の要因と事務局の対応】

18年度については活動テーマについての説明不十分、会員のニーズと活動テーマが一致しないなどの問題があったと解釈しています。

19年度については、会員のアンケートの集約を待って総会を考えていましたが、アンケートの回収が遅れ、開催のタイミングを逸

しました。併せて事務局員間の日程調整がおこなえないまま、迅速な対処ができませんでした。このように活動の停滞の直接的な原因は事務活動の遅れにありますが、ビオトープを巡る活動の活性自体の低下や交流会の魅力が明確でないことが、その背景にあるものと思われる。

シンポジウムについては、毎年、斬新なテーマで内容も豊かであったと思いますが、参加者が少ないことから活動の打ち出し方にも問題がありました。

以上、全般的には事務局の力量不足があり、本来は事務局を一新すべきですが、急な交代は難しく、当面は加藤さん、源内さん、白井さんに協力を仰ぐ形で、緩やかな体制の刷新をおこないながら、今後の活動を模索したいと考えています。

### 【当面の活動についての提案】

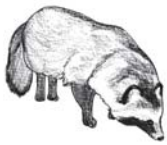
[観察会] 平成20年度の観察会については、加賀地域(加藤さん主宰)、能登地域(源内さん主宰)、白山地域(白井さん主宰)の3地域において実施していただきます。

[総会] 観察会にあわせて総会を実施したいと考えています。総会にあわせておこなってきたシンポジウムはおこなわず、簡単なものにします。

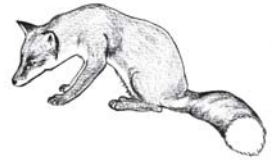
[ニュースレター] 12巻については早急に発行したいと思います。

[役員] 中村浩二会長および事務局草光紀子さんより、多忙のため役員を退任したいとの申し出がありました。これを受けて当面会長は空位とします。事務局員については草光さんの代わりに、加藤さん、源内さん、白井さんに事務局に加わっていただくことにします。(会長を空位とすることには疑問も出され、次回の総会までの暫定的な措置にしたいと思います。)

[会費の徴収] 20年度は徴収しないこととします。20年度の活動が予定どおりおこなわれたときに、各会員の継続の意志を問い、21年度より徴収することにしたいと思います。



# 交流会メンバーの自己紹介コーナー



能登島の自然をみていくなかで

源内 伸秀

2000年、「能登島って自然の豊かな所」（観光客の声）？生態系？絶滅危惧種？ビオトープ・・・？（新聞などで目にとまる）

今まであまり意識した事のない言葉に疑問を感じました。それまで、美しい自然景観である所という思いは子供の頃から感じていましたが、「自然」について今まで深く考えた事はありませんでした。

そして自分なりに「自然」について調べてみたのだが、豊かな自然とは、水、空気、その地域の自然景観、地形、地質、化石、生物（動植物）の多様性などを総称し、またその生態系のバランスが人間環境の影響でくずれてきているという事がわかった。

そして、身近な自然を調べてみようと思い、休耕田を利用して高低のある池をつくり、そこで見られる動植物を調べてみようと思いました。

2001年、いしかわビオトープ交流会の発足時に入会させていただき、今回、自己紹介という事で、自己PR、思い、問題点などを少し述べたいと思います。

住まい：能登島。周囲72km。約1万年前に能登島半島から独立。

年齢：四十？才。 家族：5人。

仕事：自営業（仏壇、神輿の製造）＆ワーク  
所属：能登の山を歩く会、県絶滅危惧植物調査員（能登島担当）

専門：植物（中級）他入門程度、マイペースでやっています。

家のビオトープ：家が築105年と古いので、いろいろな生きものがやって来ます。ネズミ、スズメ、ツバメ（繁殖）、ヤモリ、カニ（2種）、アオダイショウ、ムカデ、イソヒヨドリ（繁殖）、コウモリ（屋根裏）。水のはってあるプランターにトノサマガエルが葉っぱを頭にのせ、気持ちよさそうに我家の御風呂へやって来たことなど、四季を通して、いろいろな動植物が見られ、楽しませてくれます。

周辺の自然環境は、鳥類では、ハヤブサ、ミサゴが繁殖し、他数種の猛禽類もいるようで、海岸部では稀少種のクロサギなども見られます。植物は、過去の記録、最近の調査結果を合わせると約1,100～1,200種（自生、帰化、逸出含）が記録され、まだ少し調査不足のところがありますが、約200種近くが絶滅危惧植物になっていて、その生育環境の悪化が深刻です。また昆虫類は、過去の記録はあるのですが、まだまだ調査がされていないのが現状で、専

門的な調査が望まれます。他、両生類のホクリクサンショウウオも数箇所に生息地がありますが、個体数の激減、環境の悪化となっています。

現在の能登島は、過疎化、少子化など、里山の管理放棄で山は荒廃しています。谷地田は、奥がため池となっていますが、減反政策とあいまって、大部分が休耕され、山から海へと結ぶ川も三面コンクリート化され、生きものの往来が難しい状況です。海岸部にいたっては能登半島国定公園になっているにもかかわらず、コンクリート護岸、開発（別荘地化）、釣り人による踏みつけなど、波打ち際を澄佳と住みかとする海岸植物の消失が問題となっております。

残された自然環境の保全、失われた自然環境の復元、地域の自然環境への意識の向上、動植物の種の保存など、いろいろ課題がありますが、地域、市、県、国への働きかけ、小学校、大学、専門機関などと連携して、これからの自然との共生を、農業、漁業、林業、地域の活性化、環境教育の場などから、はかっていければと思います。

ビオトープ交流会の会員名簿をみると、いろいろな方面で専門的に活躍されている方々ばかりで、いろいろな知恵を頂き、農村ビオトープのモデルケースが地域にできればいいなと思いました。

最後に、2000年に休耕田ビオトープを作った池の下の水田は、ここ6年休耕していたのですが、25年ぶりに自らの手で、約1反、稲作に取り組んでいます。来年は不耕起で栽培し、生きものと水田との結びつきを調べてみようと思います。

また数年前より野生のミナミバンドウイルカ（北限）が繁殖し、現在5頭いるそうです。近年元気のない能登島に「癒し」と「少しの元気」を与えてくれているようです。またそのイルカの上空をミサゴが飛翔し、1年分の食料にありつけたと思ってイルカをねらっているのかどうか知りませんが、二度ほど観察する事ができました。

このいしかわビオトープ交流会、事務局は大変だと思いますが、会員として共に少しでも盛りたてていければと思います。



### はじめに

ハクサンイチゲ、ハクサンフウロなど白山の名がついた高山植物は数多い。白山は高山植物の宝庫として知られていることはいうまでもなく、夏山シーズンには白山のお花畑を訪ねる登山者でにぎわいをみせる。ところが最近、白山のお花畑が以前に比べ縮小してきているといわれるようになり、同時に、個体数の減少により絶滅が心配される種類も少なくないことがわかってきた。従来、高山植生などの原生的な自然環境を保全するためには、開発による破壊や踏み付け、盗掘などの直接的な人為的影響が最大の問題と考えられてきた。その点では、白山の高山植物群落の大部分は国立公園の特別保護区域に指定されるなど、手厚く保護されているはずである。白山に今、何が起きているのだろうか。

### いしかわレッドデータブック

白山の高山植物については、近年のものでは「白山高等植物インベントリー調査報告書」(白山自然保護センター 1995)が最も詳しく、亜高山帯以高に分布する種類として62科361種類を挙げ、白山における分布図も掲載している。また、「石川県の絶滅のおそれのある野生生物 - いしかわレッドデータブック - 」(石川県 2000)では、白山の高山植物について、絶滅1種類、絶滅危惧類19種類、絶滅危惧類48種類、準絶滅危惧52種類、情報不足4種類が記載されている。これらを合計すると120種類にもなり、単純に計算すれば白山の高山植物のうち3分の1の種類は絶滅のおそれのある種類またはそれに準ずる種類に指定されているというわけである。もちろん、絶滅の危機の度合いは指定ランクにより違い、個々の種類によっても差があるのだが、白山に分布する高山植物のうちのかなりの種類が危機に瀕しているということは、数字の上からもうかがい知ることができる。

### 近年著しいササの増加

白山登山のメインルート砂防新道は、標高2,300m付近の急坂を登りきると、白山の噴火により生まれた巨大な岩塊、黒ボコ岩が現れる。ここを境に地形は一変し、広い平坦地、弥陀ヶ原へとさしかかる。弥陀ヶ原(標高2,330m)は、とくに池塘や湿原が発達しているわけではないが、残雪が遅くまで残ることから、雪解けとともにハクサンコザクラ、イワイチョウ、アオノツガザクラなどのお花畑となる雪田群落が発達し、白山登山の見どころの一つとなっていた。ところが近年、登山道沿いはササの一種であるチシマザサが密生し、お花畑はすっかり衰退してしまった。ハクサンコザクラの群生地は弥陀ヶ原の中央部に今でも残るが、人の背丈近くにまで成長するチ



弥陀ヶ原の雪田群落に侵入するチシマザサ



チシマザサ群落の垂直分布上限付近。



シマザサにはばまれ、登山道からは見ることもできなくなってしまった。チシマザサが急速に増えた原因は、登山道ができたことによる乾燥化によるものだとの説もあるが、弥陀ヶ原におけるチシマザサの分布拡大の最前線のラインが、雪解けの進行のラインとほぼ一致することから、弥陀ヶ原の雪解けが近年早まった分だけ、チシマザサが雪田の周辺から中心方向へ勢力を上げたと考える方が自然である。雪解けが早まった原因はといえば予想されるのは地球温暖化によるものであろう。

チシマザサの勢力拡大は、垂直分布の上限付近でも顕著で、標高2,450mの室堂平まであとわずかの2,430m付近を上へ向かって進行中である。室堂平の西方では2,470m付近まで達したところもあり、なおも勢いよく勢力拡大を続けている。室堂平周辺のお花畑がササに覆われてしまうのも時間の問題と言えそうである。

### ササの侵入と絶滅危惧種

白山は有史以降にも噴火を繰り返している活火山であるため、標高2,702mの御前ヶ峰を中心とした白山本峰周辺はあまり高山植物の種類は多くなく、白山山系で高山植物の種類が多い場所は、七倉山(2,557m)、四塚山(2,530m)、別山(2,399m)、三ノ峰(2,128m)

といった白山の辺縁部に位置する山々である。こういった山々では、すでに山頂付近までチシマザサの侵入が及んでおり、雪渓の周辺、風衝地、岩場、崩壊地などチシマザサの侵入が及んでいない場所を中心に絶滅危惧種を含んだ高山植物群落が発達している。チシマザサの侵入は、雪田群落に限らず、ハイマツ群落、高茎草原などあらゆる群落で見られ、生きた茎葉はよく茂るため被陰により下方にある植物の生育を妨げるほか、硬く広い葉は枯れ落ちても容易に腐らないため、地表を覆い尽くし、地表に展葉する小型の植物や他の植物の実生を育たなくしてしまう。数多くの絶滅危惧種にとって脅威となっていることは明らかで、たとえば白山では3ヶ所しか確認されていないリンネソウの自生地1ヶ所は、ハイマツ林の縁でコケモモなどとともに群生しているが、周辺からチシマザサが侵入し始め、生育状況は年々悪化している。白山では1ヶ所の湿地でしか見られないミネハリイ群落も、湿地の乾燥化とともにチシマザサが目立ち始めている。種の保存法で指定を受けているホテイアツモリソウの自生地も、チシマザサ群落に隣接しており、一部はすでにチシマザサと混生している状態になっている。チシマザサの増加とともに衰退した植物群落、個体数の激減した高山植物はかなりの数にのぼるであろう。



チシマザサ群落の下層には何も生えない



チシマザサの侵入するリンネソウ自生地

## 絶滅危惧種の保全に向けての課題と問題

白山の高山植物群落の大部分は国立公園の特別保護区域に指定されており、増えすぎたチシマザサでさえ許可なく刈ることはできない。チシマザサが増えるのも自然現象なのだから手を加えるべきではないという意見もある。一方で、チシマザサの増加にともなって姿を消してゆく種類が次々として出てくることも確実である。この10年の間にチシマザサに覆われてしまったために白山から絶滅したと考えられる種が1種類すでに出てしまっている（タカネシュロソウ、未発表）。しかし、絶滅を確認するというのは、白山の高山植物の場合、実はかなり難しいことである。タカネシュロソウにしても広大な白山のどこかで再発見されるかもしれないし、他のどこにも絶対にはないと言い切るのは事実上不可能といえる。



チシマザサ群落の垂直分布上限付近。室堂平東。



チシマザサの侵入が進む池塘・小桜平。



ホテイアツモリ

チシマザサの分布の拡大については現在、調査を進めているところである。絶滅危惧種の現況についても、来年度にかけて行われるいしかわレッドデータブックの改訂に向けて調査を進めているが、範囲が広大であることに加え、対象種が多いため、十分な調査にはまだ程遠い状況である。なにしろほとんど一人でやっているものだから無理があることもわかってはいるのだが。絶滅危惧種の調査にあたっては、調査メンバーの高齢化、そして若手のフィールドワーカーがなかなか育ってこないのが現状である。人材不足のため現況調査さえ満足にできない中で、次の時代へどう受け継いでいくのかということが、現在そして将来にわたっての課題になりそうだ。

### チシマザサ

多雪地の深山に自生する大型のササ類。春先にするタケノコが山菜として利用されることから、一般にはネマガリダケまたはスタケなどと呼ばれ、よく知られている。県内のほぼ全域の山地に分布し、ブナ林の林床によく見られるが、標高500m以下の丘陵地から標高2500mを越えるハイマツ帯までたいへん幅広い垂直分布域をもつ種である。

なお、低標高地にはチマキザサ、オオバザサなどよく似たササ類がみられるが、これらの種は茎が細く、タケノコも食用として利用されることはほとんどない。



ネエ、ピオトープ交流会の皆さん、最近の自然環境で何か知らないけれどすごく気になることってない？具体的にうまくいえないのだけれど。

例えば、昨年に早春の自然観察会が有って参加したんですよ。準備を整えて出発。途中で先頭に行く解説員の方が立ち止まってね、

「皆さん、右手のミズナラが枯れているでしょう。ほとんど全滅ですよ。これはカシノナガキクイムシが食い荒らしているんです」

参加の女性。「あの松くい虫と一緒にですか？」

「そうです。マツクイムシはマツノザイセンチュウというムシが食い荒らして、松が枯れているのですよ」私は思わず、「エツ？虫が悪いの？」

隣の女性。「虫よね。虫が悪いのよね。わたし虫って大嫌い」

チョットあんだ、少々意味が違いますか？といたいんですよ！ほんとに！！

「虫が悪いのではなくて、クイムシが繁殖しなければならぬ自然環境が悪いのに。全て虫が悪いじゃ、虫もたまったものじゃないなあ。もっと自然環境悪化の原因を具体的に解説してほしいよなあ、まったく」と…ひとりごと。

それに、地球温暖化。

先日NHKのニュースを見ていたら、氷河が海に崩れ落ちるシーンを放映しているんや。あたかも氷河が温暖化で崩れ落ちていくような。

氷河って言うのは言葉のとおり氷が川になっているわけだから、海に注いで崩れ落ちるのは当たり前じゃない？地球のことはよく知らんけど、人類が地球に生まれてきたときから、氷河期が終わり今の温暖な気候になったときからね、氷河が流れ続け、海で崩落をしていたわけじゃない？私たちの身近な川と違わないと言うことやる？水か氷かの違いだけと思うけれど？

でもあのような映像を地球温暖化のニュースと一緒に流されると、地球温暖化が何か取り返しがつかないところまできているような印象を与えてしまうよね。温暖化が視聴者に単なる恐怖としてスリコミされちゃうんですよ。人間って恐怖心を持つと正しい思考回路が働かなくなるんだけど。

スリコミって野鳥にも有るんじゃない？生まれてすぐに動いているものを親と勘違いするって言うものがあるんじゃない？スリコミではなかったかなあ？

NHKを始めマスコミに言いたいよね。「視聴者や読者に恐怖を与えるような映像を放送すべきでは

ない。本来の自然を正直に伝えることが大切ですよ。」と…またひとりごと。

北極と南極の氷が解けると現在の海より数メートル海水面が上がる？

海水面が上昇して、台風と高潮が重なると甚大な被害が想定される？

冗談じゃない。台風と高潮が重なると、温暖化で海水面が上昇して無くとも甚大な被害が発生するのですよ。伊勢湾台風がそうだったでしょうが。このころはまだ地球温暖化や海面上昇など言葉の端にも出てこなかった時代でしょ。

それにね、南極は別にして、北極の氷が解けても海水面が上昇しないことは、2200年前にアルキメデスが「浮力の原理」一般に言う「アルキメデスの原理」で実証済みじゃない。

たださあ、「北極の氷が解けたとき海面上昇に関しては大丈夫ですよ。ただし、そこで生活をしている動物たち、アザラシとかオットセイとかホッキョクグマの絶滅とは話が違います」って言わなければならないよネ。「紛らわしいなあ。自然環境を判っていない人にどこまでご理解いただけるのかな？ほとんどの人は自分の都合のよい情報だけ取り入れるからな」…とまたまたひとりごと

えっ、プツプツ言い始めるのは痴呆の始まり？まあ年だからね。そのような傾向があることはわかっていますよ。

たださあ、自然環境が破壊され続けてきて、保護の必要性が叫ばれてきていても、あまり興味も無く真剣に取り組もうという人はほとんどいなかったのに、地球温暖化だけが恐怖として刷り込まれていく現状を、黙ってみているわけには行かないってところかな。地球っていうのはさあ、誕生以来四十数億年経ってるんですよ。それを数年の気候で活動がわかるはずが無いでしょうが。

胸に手を当てて考えて御覧なさいよ。十年前までは冬には充分すぎるぐらい雪が降って、ギフチョウなどの発生は3月も後半でしか一番ギフが出てこなかったんだよ。最近では雪も少なく、ギフチョウの発生も早まっているけれど、でも地球が温暖化している証拠にはならないことは皆さん判るでしょ。

結論を言えば、地球温暖化論に左右されないで自然環境保護に向かって行ってほしい。昆虫も植物も生存できない地球環境は、人間も生存出来ないという事をもっと理解すべきだと思うのです。

少し疲れたから眠るわ！オヤスミ。

# お 知 ら せ

## 県内における身近な自然を守る取り組み

### アメリカザリガニからシャープゲンロウモドキを守る活動

シャープゲンゴロウモドキは、環境省のレッドリストで絶滅危惧類、石川県では希少野生動植物に指定されている水生昆虫です。この昆虫の国内における最も重要な生息地の1つである、金沢市近郊の自然の池で、最近になって外来種のアメリカザリガニの侵入が確認されました。アメリカザリガニは雑食性で、水生生物から水生植物まで捕食し、爆発的な増殖力を持ち、シャープゲンロウモドキをはじめとする在来種への脅威となっています。また駆除が困難であることから、環境省では、要注外来生物に指定されています。

本会会員の西原昇吾さんを中心にして、2008年10月11月の2回にわたって、この池でのアメリカザリガニの駆除活動をおこないました。

またこの取り組みに関連して、環境省自然環境局が主催する「里なび研修会 in 石川」が、12月13日に金沢大学角間の里と夕日寺トンボサンクチュアリーにおいて実施されました。

### 河北潟における外来種除去と水辺管理の取り組み

河北潟地域は、石川県で最も広い面積を持つ内水面である河北潟とともに、周辺に多くの水路をもつ豊かな水辺環境です。この河北潟の水辺に、近年、外来種のチクゴスズメノヒエが繁茂し、水辺の在来種の生育の脅威となるとともに、農業活動を阻害する状況となっています。

チクゴスズメノヒエを始めとする繁殖力の旺盛な外来種の繁茂を防止するためには、進入をできるだけ抑えるとともに、進入した場合にできるだけ早期に駆除することが求められます。しかし、現在、農地や水路の管理者である農家には、これら外来種についての情報が十分には伝わっておらず、また行政機関や土地改良区等の広域を管理する機関においては、群落が拡大してからの対策のみがおこなわれており、戦略的で効果的な対策方針は確立していないのが現状です。

平成20年度「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」によって、河北潟周辺におけるチクゴスズメノヒエを始めとする侵略的な外来種の分布状況の把握と効果的な対策の検討がおこなわれています。また、11月～12月にかけて、試験的に外来種の除去活動を4箇所を実施し、住民参加型の活動形態を追求するとともに、その結果をモニタリングしています。

いしかわビオトープ交流会事務局では身近な自然を守る取り組みについての情報を募集しています。みなさまが関係している活動を、ニュースレター「身近な自然」に掲載してみませんか。本紙を交流と活動参加の枠を拡げる場として利用して下さい。



### ビオトープ交流会観察会のご案内

「山地に生息するワシタカ類とその生息環境の観察」

2009年2月8日(日)10時～14時

集合場所：金沢市キゴ山天体観察センター手前の駐車場

キゴ山からは、金沢の市街地から近郊の里山、さらに犀川源流の奥山まで広く一望することができます。なかなか出会う機会の少ないイヌワシ、クマタカ、オオタカなどが上空を飛翔するのを探してみましょ。また、ワシタカ類にとっての生息空間を鳥の目になって観察してみたいと思います。

当日、双眼鏡と望遠鏡は何台か用意しますが、お手持ちの双眼鏡や望遠鏡がある方は持参してください。遠距離の観察になるので、双眼鏡や望遠鏡は三脚に固定した方がよいです。キゴ山までは除雪が行われますが、凍結することも多いので、冬タイヤでお越しください。

昼食持参。悪天の場合は特別メニューに変更。

企画者：白井伸和さん

## 「身近な自然」 No.12 新春号

2009年1月1日

発行所 いしかわビオトープ交流会

Email:biotop@yupapa.net

http://biotop.yupapa.net

事務局：〒920-0051 金沢市二口町八58

Tel.076-265-3323 / Fax.076-265-3435

北陸水生生物研究センター 気付

